

## コロナ禍の体験学習

南山大学経営学部経営学科 中尾陽子

コロナ禍では色々なチャレンジを迫られているが、中でも授業に関しては、結構チャレンジをしてきたと感じる。筆者の担当する授業では、メンバーとの関りを通して学ぶことに力を注いでいる。ゼミのような演習科目はもちろん、知識の伝達中心になりがちな大人数科目でも意識的に取り組んできた。ところが、2020年2月頃から国内でもCOVID-19の影響が本格化し、3月には全国一斉休校が始まってしまった。その頃から、「来年度の大学の授業はどのようなだろう…?」という不安も高まっていった。とはいえ、未知のウィルスが相手では、今後の方針もなかなか決まらなかった。例年は学生さんたちの様子を思い浮かべながら楽しく準備するのに、あの時は全くやる気が起きず、突然の長い春休みで暇を持て余す息子と、毎日ひたすら散歩ばかりしていたことを思い出す。

そして、2020年度の授業は全面的にオンラインでスタートすると決ってしまった時、とにかくまずは3年生のゼミをどうしようかと悩んだ。なぜならこのメンバー達は、2019年秋、世がこんな状況になるとはつゆ知らず、ラボラトリー方式の体験学習を通して人間関係を学ぶこのゼミを選んでくれた人達だったから。そんな彼らに、オンラインであっても体験を通して学ぶ場を創ることは、何としてでもやらねばならない、そして、この事態になってしまったからこそできるチャレンジだと考えた。

ただ、オンラインで実施できる体験学習プログラムは少なく、既存のプログラムの改変や新たな実習の検討に迫られた。また、実際にオンライン体験学習を実施してみると、どうしてもプロセスを捉えにくく、メンバーの内面やお互いの関わりの中で何が起きているのだろうか? メンバー達は楽しく学んでいるのだろうか? という不安が常につきまとった。オンラインでは、授業前後の雑談もしにくくて、余計に困っていたと感じる。この時支えになったのは、メンバーが授業後に書いてくれるジャーナルだった。「不安だったけど、こんな関わりができて安心した」「相手のことや、まだ関わっていないメンバーのことをもっと知りたい」というような、予想以上に前向きな言葉が満ちていたことに、大きな勇気ももらった。

また、秋学期に入って初めて対面でゼミをした日の光景は忘れられない。隣と1m以上距離をとり、向き合わない座り方を求められる中、メンバー達は、「もっと離れて〜!」と何度お願いしても、話しているうちにどんどん近づいていってしまった。そのような彼らの姿を目の当たりにして、人は直に関われない中でも、相手をもっと知りたいという思いや、つながりを求める気持ちが生まれることを、本当に信じるのができたように感じる。

このように、コロナ禍の体験学習は、コンテンツだけでなく、プロセスを捉え働きかける上でもチャレンジの連続だ。筆者自身、この体験から多くのことを学んでいると感じる。いよいよこのメンバーが卒業する時期となった今、オンラインでの関わりを含むラボラトリー方式の体験学習は彼らの学びをどのように支えることができたのか、改めてふりかえっておく必要があると考えている。